Tathāgata（如来）の原意をめぐって

長崎法潤

Ⅰ

原始仏典の中で古層に属する詩に見られる Tathāgata の用法をとりあげたい。『ダンマパダ』には次の二詩に見られる。

「虚空に足跡はなく、外道に沙門はない。人々は虚妄を喜び、諸々の如来（Tathāgata）には虚妄はない。」[Dhp. 254]

「諸々の如来（Tathāgata）は〔このように〕説く。汝等は努力すべきである。禅定に住して〔この道を〕行く者どもは、魔王の束縛を脱する。」[Dhp. 276]

ここでは Tathāgata は複数形である。第二五四詩は次の第二五五詩と対になっている。

「虚空に道はなく、外道に沙門はない。万象は常住ではなく、諸仏には（buddhānam）動揺はない。」[Dhp. 255]

ここで注目すべきことは、虚妄を喜ぶ衆生に対して諸如来、常住ではない万象に対して諸仏となっていて、諸如来を諸仏と言い換えたのである、と理解することができる。つまり、諸如来は諸仏と同義に理解していると言える。ところで諸如来とは、如来一般を意味するであろうが、多数の如来の存在を想定している、と言える。

次に、『スッタニパータ』における Tathāgata の語は、二二四、二三六～二三八、三四七、三五一、四六七～四七八、五五七の諸詩に見られる。そのうち第二三六～二三八詩にあらわれる tathāgata は、仏法僧にかかる形容としての用法であり、「完成した」という意味である。Tathāgata の複数形は、第三五一詩に一回あらわれているだけである。

「諸々の凡夫は〔知りたい言いたいと〕欲することをなすことができない。諸如来（Tathāgata）は慮智ありて〔知りたい言いたいと望むことを〕なすからである。」[Sn. 351cd]

これは、尊者ヴァンギーサが自分の師ニグローダ・カッパ長老が涅槃したありさまを世尊にたずねる詩の一つであり、一般的に諸如来の意味である。

Tathāgata の単数形のうち、ゴータマ・ブッダ自身をあらわしているのは次の詩である。

世尊が答えた、「セーラよ、わたしが転じた輪、〔即ち〕無上の法輪を、如来（Tathāgata）につづいて出現した舎利弗が〔わたしに〕次いで転ずる。」[Sn. 557]

ここでは明確にゴータマ・ブッダ自身を意味している。

「この世で、およそ束縛なるものは、愚痴の道であり、無智のたぐいであり、疑いの根拠であるが、如来に出会うと、それらはなくなる。この〔如来〕は人々の最高の眼であるからである。」[Sn. 347]

という尊者ヴァンギーサの言葉もゴータマ・ブッダ自身を指している。

Tathāgata の単数形がブッダ自身をあらわす上記の二例のほか、他は一般的に一人の解脱者としての如来をあらわしている。たとえば、

「此世他世のいかなる財富も、諸天界のどんな勝れた財宝も、

如来(Tathāgata) に等しいものはない。この勝れた財宝は仏(Buddha) のうちに存する。」[Sn. 224]

「如来(Tathāgata) は、等しい方々（諸の目覚めた方々）とは等しく、等しくない方々より遠ざかっていて、無限の智慧(ananta-paññā) をもっている。この世でも他の世でもけがれることなく、如来は献菓〔を受ける〕にふさわしい。」[Sn. 468]

ここにおける Tathāgata は、具体的にゴータマ・ブッダ自身を指してはいない。無限の智慧をもち、けがれることのない解説者としての如来一般をあらわしている。「如来は献菓〔を受ける〕にふさわしい」という句を含む第四六七～四七八詩の如来（Tathāgata) はすべて、解脱者としての如来一般をあらわしている。

以上によって、『ダンマパダ』『スッタニパータ』における如来(Tathāgata) の用法を次のようにまとめることができる。

(A)　ゴータマ・ブッダ

(B)　解脱者としての如来一般

(C)　諸如来（複数形）、解脱者としての如来一般

ところで、具体的にゴータマ・ブッダをあらわす用法は明確であるが、それに対して如来一般をあらわす用法はいったい何を意味しているであろうか。いわゆる如来の概念が一般的にあったことを意味していると理解できる。初期の仏教の内部のみにあったのではなく、仏教興起の母胎である遊行する沙門たちの中で、いわゆる如来の概念があったことを意味している。ゴータマ・ブッダは如来になった一人であるが、他にも如来になった人々があったにちがいない。そこで、遊行する沙門たちの中で一般的に用いられていた如来の意味について、さらに検討を加えることにする。

二

『スッタニパータ』第四六七詩から第四七八詩までの十二詩は、Tathāgata（如来）について説かれ、それぞれその最後は「タターガタは献菓〔を受ける〕にふさわしい（tathāgato arahati pūraṇāsaṃ)。」という句によって終っている。その中から第四六九と第四七一の二詩に注目したい。

「そこに偽り (māyā) あることなく、慢心 (māna) なく、貪欲 (lobha) を離れ、我執なく (amama)、欲なく (nirāsa)、怒り (kodha) を除き、自ら寂滅し (abhinibbutatta)、憂いの垢 (soka-mala) を除いた〔真の〕バラモンであり、タターガタは献菓〔を受ける〕にふさわしい。」[Sn. 469]

ここで語られている徳目と同じ徳目がジャイナ教の古い聖典の中にも見られる。すなわち、koha（怒り）、māna（慢心）、māyā（偽り）、loha（貪欲）の四種の煩悩を征服することによって、khanti（忍耐）、maddava（柔和）、ujju-bhāva, ajjava（正直）、saṃtosibhāva, saṃtosa（満足）が心に生ずる。それによってジーヴァに新しい業が漏入することがなく、さらに、すでにジーヴァに附着した古い業を滅する (Utt. 29-69～72; 9-56, 57)。さらに、「我執なく (amama)」、「欲なく (nirāsa)」の二徳目についても、ジャイナ教聖典 (Utt. 21-21, Dasaveāliyaṃ 8-63; Dasaveāliyaṃ 9, 4, 6) に共通する徳目である。このように、第四六九詩の内容がジャイナ教聖典にも共通して見られる事実をどのように解釈すべきであろうか。第四六九詩の徳目とジャイナ教聖典の徳目とが同じ源流にもとづいていると考えられる。したがって第四六九詩に見られるタターガタの内容は、仏教、ジャイナ教に共通

する源流にまでさかのぼることができるのではなかろうか。

「精神統一し(samāhita)、洪水(ogha)を渡り、最高の知見をもって法を知り(dhammañ ca ñāsi paramāya diṭṭhiyā)、漏が尽き(khiṇa-āsava)、最後身(antima-deha)を保つタターガタは献菓〔を受ける〕にふさわしい。」[Sn. 471]

ここで説かれている「洪水を渡り」「最高の知見をもって法を知り」「漏が尽き」「最後身を保つ」というタターガタを形容する句は、古層の原始仏典と古層のジャイナ教聖典に共通して見られる一つのモチーフにもとづいている。すなわち「洪水」は老死に代表される迷いの生存、すなわち輪廻を意味し、洪水を渡って行きつくところは「洲」という法・真理、最高の帰依所、涅槃の世界である。したがって、タターガタとは、輪廻の洪水を渡り、法、最高の帰依所、涅槃の世界に到着した解脱者であり、輪廻の洪水の水（輪廻因、煩悩）が漏れ入ることがなくなり、再び輪廻の世界に生まれることのない最後身を保つ者である。要するに第四七一詩におけるタターガタとは、輪廻の洪水を渡った解脱者であり、再び輪廻の世界に生まれることのない者を意味している。

ジャイナ教古層聖典における Tathāgata の用例は、Āyāraṅgasutta 1. 3. 3; Sūyagaḍaṅgasutta 1. 15. 20; 1. 13. 2 の三ケ所に見られる。

「智慧あるタターガタたちは、どのようにして、いつか〔再び〕生まれるであろうか。またタターガタたちとは、〔カルマの結果を〕欲することなく、世間の眼を有し、無上〔の知〕を有する者である。」[Sūy. 1. 15. 20]

における「どのようにして、いつか〔再び〕生まれるであろうか」とは、Cūrṇi 註によれば、「人間としての生、あるいは他の生に再び生まれることはない」という意味であり、タターガタたちとは、「解脱に達した者(mokṣa-gata)たち」と記されている。また、Śīlāṅka 註では、tathāgata を語義解釈して、tathā（そのように）とは、「再び来ないように(apunarāvṛttyā)」、gata とは「行ける者」としている。「再び来ないように」とは、再びこの輪廻に生まれることがないように、という意味である。それは、「カルマの取著がないから」である。すなわちタターガタとは、「カルマの取著がないから、再びこの輪廻に戻り来ないように行ける者」、と解釈される。

このようなタターガタの意味は、ジャイナ教古層聖典の『イシバーシヤーイム』における聖仙の言葉の最後に説かれている内容とも符合する。さらに同聖典に伝えるパーサの言葉では、輪廻を断った解脱者は「再びまた、この世の状態に帰り来ることがない」となっている。パーサによって説かれた解脱者の概念がジャイナ教にそのまま伝えられている。

『スッタニパータ』第四七一詩のタターガタとは、輪廻の洪水を渡った解脱者であり、再び輪廻の世界に生まれることのない者という意味であった。これはジャイナ教古層聖典における意味とも符合する。タターガタのこの意味は、仏教とジャイナ教の源流にまでさかのぼることができる。当時の遊行者たちにとって最も関心の強かったことは、輪廻からの解脱であった。タターガタの原意にもそのことが反映されたのである。